

『ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本』〈写真版〉

―出版に寄せて―

現代に蘇る『法華經』の精神

池田大作

釈尊生誕の国・ネパール王国。

私が「人類の精神の故郷」を初めて訪問したのは三年前の一九九五年十一月のことである。その折、ビレンドラ・ビール・ビクラム・シャハ・デーヴ国王陛下を表敬し、友好の語らいをもった。また、国立トリブバン大学で栄誉ある「名誉文学博士号」を受け、「人間主義の最高峰を仰ぎて――現代に生きる釈尊」と題して記念講演

をさせていただいた。その時、真心から歓迎して下さった人々の美しき微笑が、今も私の脳裏に刻まれている。

古来、ヒマラヤの麓に「太陽の裔すえ」を名乗る勇敢なるシャカ族の人々が住んでいたと伝典（「スッタニパータ」）は語る。太陽の国――私どもが信奉する日蓮大聖人の仏法との不思議なる縁えにしを想う。

一九九二年の十一月、東京でトリブバン大学元副総長

のスーリヤ・B・シャキヤ氏と“人類の教師・釈尊”や『法華経』について語り合った。同氏は、『法華経』に説かれる「虚空会の儀式」について、「仏の偉大な境地の象徴であり、その『現在』のうちに、『過去の十方世界』も『未来の十方世界』も含んでいる。時空を超越しているのが『仏界』である」と、深意を洞察されていた。

日蓮大聖人は、虚空会の意義を、「三世の説法の儀式なり」と説かれ、そして、その会座に涌出する地涌の菩薩について「地涌の菩薩のさきがけ日蓮一人なり……日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか」と仰せである。五濁悪世において、尊厳なる「仏の境地」を顕現するには、不正と闘う勇敢なる“精神闘争”が要請されるであろう。

私の恩師である戸田城聖創価学会第二代会長は、第二次世界大戦中、軍国主義に傾く国家権力により、不当にも投獄されたが、獄中で全生命をかけて『法華経』を読まれた。

“仏とは生命である。宇宙生命の一実体である”と悟達され、「虚空会の儀式」に地涌の菩薩として参列して

いる自己自身の姿を覚知されたのである。莊嚴にして、鮮明な、「久遠の儀式」の体得を経て、出獄後、全民衆の生命変革の“鍵”として掲げられたのが、『法華経』の真髓である。「全人類の人格を最高の価値にまで引き上げていこう」と語られていた。

会談の折、シャキヤ氏からは、ネパール国立公文書館所蔵の『法華経貝葉本』(No. 3-678)の貴重な複製を贈呈していただいた。同公文書館のほう大な資料に加え、ネパールでは、ごく普通の家庭に二百―三百年ほど前の写本が保存されていると聞く。まさに中世以来の経典写本類の宝庫であり、仏教文献遺産、原典の研究に欠かすことのできない貴重な存在である。ここに心からの敬意を表したい。

さて、この度の『法華経写本ネパール本』(No. 421)の発刊は、時を超えて釈尊の精神を現代に蘇生させる作業であり、人類の精神的遺産として、また今後の原典研究の貴重な資料として、来るべき二十一世紀の光源となりゆくものと強く確信している。本出版に対して絶大なご支援を賜ったネパール王国文化省、並びに国立公文

書館の皆様にご満腔の感謝の意を表したい。

一九九八年八月二十四日

(いけだ だいさく / 創価学会名誉会長)

創価学会インタナショナル会長)

(本稿は一九九八年十一月十八日に出版された『ネパール国立
公文書館所蔵梵文法華経写本』〈写真版〉の「巻頭の辞」を
転載したものです。)